

一人でも多くの 笑顔が見たい

野村 文夫 さん (大村町)



周りの人から「鉄人」の愛称で親しまれている野村文夫さん。自作の竹箸をプレゼントするのが生きがいの一つで、20年間にわたり作り続けている。

「妻が鉄人と呼ぶようになってから、いつのまにか親しい人からも鉄人と呼ばれるようになった」と野村さん。20歳の時に麻酔なしで虫垂炎を手術したり、重機を使わないと動かせないような大きな庭石を人力で移動させたりと「鉄人」ぶりがうかがえるエピソードが多くある。

定年まで勤めた病院では、優良ボイラー技士として活躍し全国表彰を受賞した。その時、当時の労働省労働基準局長から「職場や地域の模範となって活躍されるように」とお祝いの言葉があり、今でもその言葉が胸に残っているという。

「誰かの役に立って、その人に喜んでもらえるのがうれしい」と話す野村さん。近所の保育園で壊れたところがあれば修理に駆けつけたり、定期的に近くの用水路の掃除をするなど、日頃からボランティア活動にも積極的に取り組んでいる。

竹箸づくりに精を出すようになったのは、母親が入院した際、同室の患者に自分で作った竹箸を贈り、喜んでもらったことだ。始めた頃は1膳作るのに時間がかかっていたが、製作工程の見直しや自作の道具を揃えることで、何倍ものスピードで作ることができるようになった。最近では竹箸だけでなく、モウソウ竹を使ったハンガーや器も作るようになり評判も上々だ。

自作の竹箸は、材料のモウソウ竹を東陽町の竹林から切り出し、自宅の作業場で削った後、ロープに吊して乾燥させ、お手

製の箸袋に入れて完成する。この一連の作業をすべて一人で行っている。

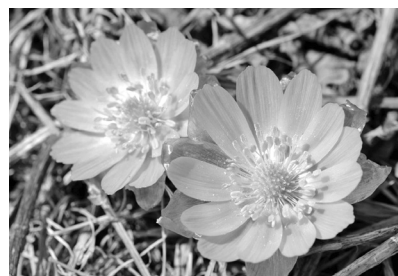
東日本大震災では、ラーメンを食べ終わった人が、割り箸をもらいたいという新聞記事を読んで、「自分にも協力できることがある」と2カ月間竹を削り続け、被災地に約1500膳の竹箸を送った。「お礼の手紙が届いたときはとてもうれしかった」と当時を振り返る。熊本地震でも被災地へ竹箸を送り、被災者との交流が続いている。お礼の言葉や手紙は、次への原動力になるそうだ。

また、竹箸作りだけでなく日曜大工全般が趣味で、緑のカーテン作りにも積極的に取り組み、平成28年度緑のカーテンコンテストで市民部門の最優秀賞を受賞した。土作りは野菜くずに油粕を混ぜたものを使用し、資材は昨年使用した角材や竹を再利用するなど環境に配慮した取り組みが認められた。

「やりたいことやアイデアが次から次に出てくるので時間が足りない」と笑顔で話す野村さん。「鉄人」の探究心はこれからも続く。



▲慣れた手つきで竹を削る野村さんと自宅の庭で乾燥している竹箸



2017.MARCH

No.147

- 3 友好都市締結20周年記念事業
- 4 フードバレーやつしろの取り組み
- 6 コミュニティセンター開設
- 7 やめよう放置自転車
- 8 暮らしの情報
- 14 市民カレンダー
- 16 暮らしの情報
- 23 広告
- 24 まちのわだい
- 27 伝言板
- 28 日奈久温泉スプリングフェスタ

広報やつしろは、市ホームページでもご覧いただけます。
トップページ → 総合案内 → 広報やつしろ